資料

聖嶽遺跡第一次調査記録「ひじりだき日記」

記録　緒方計佐美（故）
解説　矢野徳弥

資料一　遺跡調査の実情（事前）

―昭和三十六年十一月、「本匠村報」―

大字宇津々の聖嶽洞窟で発見された人骨が一万年前のものか、否か、いまや学会の話題となっており、現在東京大学考古学と人類学の両教室で科学的な検討が加えられているが、これが一万年前のものとなれば、これだけ完全な人骨としては日本最古のものと言われ、人類学上貴重な資料となるので、各新聞・ラジオ・テレビなどが、発見早々色々と報道したが、一部誤報もあったので、聖嶽遺跡調査の実情をお知らせします。

調査の契機としては八月の村報でお知らせしたとおりで、最近の土木工事等によって未調査の埋蔵文化財がこわされたり、なくなったりして記録も残らなくなりつつあるところから、これが保存対策の基礎資料とする為に行われた一斉調査でありました。

別府大学の賀川教授から約四時間の考古学講座を受けた本村の調査員、高橋・笠村・緒方のインスタント考古学者は早速調査計画をたて、風戸山の寺屋敷を手はじめに九月十三日問題の聖嶽に足を運んだ。この聖嶽の場合はユブ天神の上に洞窟がありその中に骨があると言う話を聞いていたので、宇津々の染矢直三郎氏からもそのことを聞き案内を頼んで入洞、入口より十㍍位入ったところで岩が真っすぐに二㍍程切立ち、すでに用意していた綱を上の岩にかけて下った。ここから奥まで三十八㍍の表土に無数の骨片を採取して第一回の調査を終えた。

その後十月五・六日佐伯市で行われた文化財講習会にもって行き賀川教授に見てもらい、聖嶽の状況を説明したところ、骨片は九大に鑑定のため送ることにして、賀川教授は現地調査をすることになり、十月二十日同教授が来村し再び染矢直三郎氏の案内で入洞、このとき歯が

六本ついた第二臼歯の著しく小さい下顎骨を発見しこれによって、今から一万年前の人骨発見とラジオや各新聞が騒ぎだし報道されたのはご承知のとおりです。

なおこの裏付け資料を得るため、再び二十二日賀川教授が別大附属高校後藤教諭とNHKのテレビカメラマンと共に第三回調査に入洞した。

この結果賀川教授の新聞発表予想どおり、約一万年前に使用されていた細石器九点、石刃七、石核一、石剥片一を発見することができた。引き続いて十月二十四日第四回調査では比較的新しいものと思われる完全な頭蓋骨を発掘した。

その後十一月七日この村報資料を取るため、広報主任と緒方調査員が入洞した際にも写真のような細石器(石核一)を洞内表土中から採取した。(写真は不鮮明のため省略…解説者)

以上がこれまでに調査された概要であるが、人骨が一万年前のものとなれば日本における重要な遺跡と言うことになり、仮に人骨が比較的に新しいものであっても、石器出土の関係から太古の人間の穴居跡ということで完全なこの時代の石器が発見されたのは、県下でははじめてといわれているので十二月頃には学会の専門家による本格的な発掘調査が行われる予定です。

なお聖嶽は本格的調査までは教育委員会の許可がないかぎり入洞禁止をしていますので、学術研究に協力の意味から勝手に入洞しないように御願いします。

資料二　ひじりだき日記①

―昭和三十七年十一月、「本匠村報」―

最近九州、四国は考古学ブームで、福井洞窟、須玖遺跡、上黒岩遺跡、大分県では丹生台地と本村の聖嶽洞窟の発掘調査が行われ、いずれも相当の成果を挙げているようで、連日どこかの新聞に日本で初めてのものが発掘されたと大々的に報ぜられております。しかし記事をよく見ると、各社の報道はまちまちである上に同一の新聞社の報道でも前後の矛盾するものもあるようですから、聖嶽の本年度の調査終了を機会に調査の概要とその成果について、日を追って紹介しましょう。

ひじりだき覚書

昭和三十六年九月十三日　大分県遺跡台帳作成のた

め、遺跡調査第二日本村の調査員高橋智氏と二人して、かねて話を聞いていた大字宇津々の聖嶽へ向う、染矢直三郎氏の案内で石灰工場と天神橋の中間から山道を行くこと約二百㍍、それより先は杉林、雑木林の中をくぐり更に二百㍍位にして現地に到着、入口より約十㍍の所でロープをかけて降下、これより奥まで無数骨片あり、表面に出ている部分を採取し東公民館に保管する。

十月二十日　佐伯市における文化財講習会の際別府大学賀川教授に洞内の説明を行い、前回採取した骨片の調査研究を依頼したところ、この日宮崎県の遺跡発掘の帰途同教授が来村、二人で聖嶽入洞を試みるも位置を確認できず午前中山中をうろつく、午後更めて染矢直三郎氏に案内を依頼し入洞、このとき第二臼歯の著しく小さい下顎骨を発見、これが新聞、ラジオ、テレビで問題になった。

一万年前の人骨ここに登場

十月二十二日　賀川教授と別大附属高校の後藤教諭とNHKテレビマンが来村し高橋、緒方、染矢氏が一緒に入洞、人骨の裏付けとなる遺物採取に主力をそそぐ、洞内のほぼ中心付近の水滴の小穴より後藤教諭、一万年から一万三千年前に使われたものとされている細石器を採取したことから色めきたち、付近を長さ一㍍、巾四〇㌢、深さ五〇㌢を試掘の結果、黒曜石からなる細石器それも石刃七、石核一、石剥片一の計九点、いずれも明確なものを採取。

十月二十四日　賀川教授来村、村職員二名とともに入洞、この日は表土中より完全な頭蓋骨を発見採取。

十一月七日　村報取材のため村職員五人が入洞、十月二十二日試掘の際堀りおこした土中より石核一を採取、賀川教授に送付。

昭和三十七年一月十四日　賀川教授と人類学の新潟大学小片教授、考古学の慶応大学江坂輝弥教授が来村入洞、表面に残る人骨を採取しているうちに骨角器らしきもの一片を採取す。

十月六日　幾度か変更のあった聖学洞窟の学術調査が十月は八日より十五日までと本決り、この日九電より洞内の電灯架設のため電工氏来村、宇津々部落の青年二名と、中学生四名の協力をえて架設作業を行う。夕刻賀川教授と別大研究室の岩尾氏来村。

十月七日　賀川、岩尾両先生と入洞し洞内の測量を行

う、夕方新潟大小片博士到着。

十月八日　この日から発掘調査開始、青年団二名、宇津々部落より一名の作業員が出動、午前中洞内に点灯完了。賀川、岩尾先生は測量、小片博士は表土中の人骨調査開始。以下は次号へ。　教育委員会　緒方書記

ひじりだき日記②

―昭和三十七年十二月、「本匠村報」―

本格調査始まる

十月九日　早朝別大附属高校後藤、地質学の臼杵高校姫野両教諭到着。

洞内□□五五、五メートルを十区に分けこのうち六区間を調査する、この日試掘の際出土した第三区において黒曜石一点と安山岩の石器らしきもの一点を採取、小片博士の人骨班は二区の表土中から古銭六枚と貝の腕輪を採取、五区の賀川教授班は表土をはぎその下の砂礫層をはぎ次の粘土層を竹ベラで丹念に調査中表面より、古人骨らしき化石化した距骨を発見、層位からみて細石器年代と推定されることから、小片博士の鑑定を求めたところ現在人の骨とは著しく異なっていることからしても細石器年代と推定された。小片博士曰く「ゆうに三年以上この骨で楽しめる」と。

十月十日　五区より黒曜石七点、三区より二点を採取、はぎとった粘土を更に洞外に持ち出して水洗を行う。岩尾氏五区の粘土層の表面より人骨器らしきもの二点を採取、小片博士鑑定の結果人骨に相違なし、二点とも先を焼きとがらしたものであり人骨器と石器の発見で洞内は色めきたつ。

午後日本考古学協会委員長八幡一郎東大教授現地に到着入洞。夕方旅館で発掘の人骨器について八幡、小片、賀川教授を中心に研究討論の結果、古人骨でないにしても骨器に間違いないと意見一致、中の海めん状のものが完全にないところから或いは食人についての今後の研究材料になる由。

十月十一日　午前中洞内で人骨器についての討議さかん。小片博士午前中二、三、五区の表土中の人骨調査完了、十月九日発見の古人骨らしき距骨と、その後表土中の人骨を比較対象の結果完全に古人骨であるという自信を深め、午後は聖嶽古人の学名につき話がはずむ。

原人の後頭骨現わる

十月十二日　午後洞内の中央で本洞と支洞の別れめの大落岩の下方を表土より順次はぎ取り土を整理中、午後四時何分か、後頭骨を発見、位置が粘土層であることと、割れた一部分からみて、完全に化石となっているので発見した状況のまま小片博士の指示で土層とともに採取、厚さが十三㍉もあり現在人の二倍ないし三倍もあって完全に化石化しており、その形はネアンデルタールに最も近いと云うこと。

人骨の研究で理学と医学の博士で、これまで何百体の古代人骨や現在人骨を見てきた小片博士もこんな古いものを見たことがないと、縄文期の人類等今日まで日本で発掘されたすべての古人骨でも、現代人の祖先には全く対比するものがなく、死滅人類である原人骨だとびっくりぎょうてん、骨をかかえてあっちにうろうろ、こっちにうろうろ。早速作業中止、帰館して他の洞穴調査中である日本考古学協会洞窟委員会のメンバーに「タダ・カンゲキ」を打電するやら、長距離電話をかけるやら、夜中に佐伯より学術書を取り寄せ、ネアンデルタールや北京原人等の骨と比較研究、ついに小片、賀川両教授は興奮のあまり、睡眠薬を飲むもききめなく一睡もせずとの由。

十月十三日　昨日の原人骨?を小片教授捧持し入洞、現在まで出土したもので未整理のものを写真や図にとる。

十月十四日　午前中洞内の未測量部分を測量し、宇津々原人発掘付近の発掘と整地を行い、午後は洞内の整理と施設用具の撤収をして調査を一日早く打切り今回の調査を一応完了。

本調査で大きく発展したため重ねて調査が行われるものと思いますのでそれまでは学術研究に協力するために聖嶽の入洞はしないように御願いします。教委　緒方

《資料解説》

「旧石器時代の石器と人骨が一緒に出土した日本で唯一の遺跡」として評価された来た聖嶽(ひじりだき)遺跡であるが、一九九九年(平成十一年)十二月の再調査(文部省科学研究費特定領域研究《日本人および日本文化の起源に関する学際的研究》)の結果、「石器、人骨年代に疑問があり、旧石器遺跡とは証明できない」という厳し

い結果になった。

自分の村の誇るべき歴史遺産と考え、機会あるごとにその顕彰に尽くして来たものの一人として、まことに残念でたまらない。

その調査の報告書は、当初の予定からだいぶ遅れて、昨年(二〇〇一)六月に刊行され、執筆者である春成秀爾教授(国立民俗博物館)が来村の際、その一部を私もいただいた。

第一次学術調査より三十七年、科学の発展により調査の方法も著しく進歩し、石器や人骨に関する情報の蓄積も増加している事を考えると、新たな調査により遺跡に対する評価が大きく変わったとしても不思議ではない。専門の知識を持たない私としては、現在のところ報告書の内容を素直に受け取るしかない。

このうち人骨については、年代測定の結果に異論はなく、形質の解釈についても納得できる。一部には第一次の調査で出土した頭骨など(現在新潟大学に保管)の科学的検査を行ったうえで結論を出すべきだとの意見もあるが、出土の環境を考えると、それが旧石器時代のものである可能性は極めて低いと言える。

問題は石器である。春成教授は、

①第一次調査に関するいくつかの報告の中で、出土した石器の数や日時の記載に食い違いが見える。

②年代の異なる石器が混在して出土している。

③石器のあった場所が撹乱されている。

④ガジリ(鉄などの錆びのついた傷跡)のある石器が含まれている。

などのことを挙げ、学術的に評価できないとしている。

しかし、この判断には異なる意見もいくつかあり、今後の論争が待たれるところである。

またこの問題について、歪められた内容がある週刊誌に報じられ、結果として不幸な事件を招いたことから、日本考古学会の聖嶽(ひじりだき)遺跡問題調査委員会(委員長・高倉洋彰西南学院大学教授)、九州考古学会、大分県考古学会、別府大学などが共同して検証に乗り出し、現在もその作業は続いている。

こうした事情の中で関係者から、第一次調査の内容を詳しく知る手掛かりとなるものを求められているが、遺憾ながら、その頃の関係者のほとんどは他界し、これという文書記録も残されていない。

そのなかでただ一つ、このとき本匠村教育委員会の職員として調査に協力した緒方計佐美氏（故人）が、村の広報紙「本匠村報」に載せた報告が残されている。

緒方氏は同村出身の羽柴弘氏（史談会副会長）に私淑して早くから歴史に興味を持ち、また長く広報紙の編集に携わっていて文筆は得意であった。

調査団の宿舎が叔母の家であったこともあり、賀川教授、小片教授とは文字通り寝食を共にして調査に熱中した。この記録はその間に教えられたことを書き留めたものと思われる。公式のものではないが、検証のうえで何らかの参考ともなれば、故人のためにも有り難い。

二〇〇二年四月三〇日

囲峠ほか

スミツケ祭りなどで有名な字目町の木浦鉱山は長い歴史をもっている。保元二年（一一五七）の発見ともいわれており、スズをはじめ、銀・鉛などを主体に、江戸時代には尾平・九折などとともに岡藩が鉱山奉行を置いて直営した。

採掘奨励のため扶助米なども出されたため、人も集まり、木浦千軒といわれるほど住民は多かった。

山深いところとはいえ、鉱山のにぎわいは交通を発展させた。それが数多くの峠である。峠には南に藤河内と結ぶ囲峠、大切峠・尾越・北には御泊に抜ける生木峠などがある。

囲峠は鉱山から落水を経て中岳川源流をさかのぼり、新百姓山と天神原山の間を越える。下れば藤河内渓谷の上に出る。いまでは途中まで山腹を巻く車道がつくられている。これもエメリー鉱山が移動しているためで、途中にも廃坑が見かけられる。しかし、車道から別れて登る峠路はほとんど利用者はなくなり、道は荒れた。

大切峠は天神原山と横岳の間にある。鉱山事務所の横から谷沿いに鉱山のために開かれた車道が通じており、終点から三十分ほど歩けば頂上に着く。そのまま下れば藤河内と真弓をつなぐ道に出合うが、下らず山腹を伝う道に行けばもう一つ尾根を越し、藤河内に出る。この峠を尾越という。

天神山は北西と南が急傾斜である。断層が通っているためだ。しかし、北東北面は山頂からゆるやかな斜面になる。変質した石灰岩からなる隆起準平原で、天神原という名は本来、この高原から出たもの。大切峠や尾越の道はここを通る。かつて歩いたときは、雑木林のなかに遊女の墓といわれるものがあった。これも鉱山全盛時の名残だが、いまどうなっているだろうか。

一方、御泊―木浦の生木峠は、昔、岡城下から鉱山に入る本道だったようだ。古い文献に「轟村より木浦村まで三里。うち生木坂上り五町、下り七町、難所なり」とある。だが、前記の峠に比べればまだまだ楽な方だ（『大分合同新聞―峠シリーズ(117)』昭和五十三年五月十九日版）。